

# 平安朝陰陽道と安倍晴明

山上伊豆母

はじめに

安倍晴明と式神

陰陽師晴明と功験

おわりに

はじめに

青丹よし平城京をわずか七十年余で見すて、長岡京から平  
安京遷都を断行した史因については諸説あるが、要するところ  
帝都内に集中した諸寺仏僧勢力から解放せられ、宗教の権勢に  
束縛されない山城平野に、桓武新政による律令再編成を中途と  
したものと云えるであろう。そのため大寺はおおむね都心から

隔たった山頂に遠ざけられ、朝廷はもっぱら政務の有職故実と、  
和漢の文芸の府と化していき、いわば、言挙げなき、政教分  
離の文化革命が行われたのが平安初期の趨勢とわたしは考え  
る。

それにしたがって、宗教界も大きな変貌をとげた。奈良期の  
鎮護国家を目的とする国家仏教は解体をはじめ、神仏習合の名  
のもとに仏教の護法神であった諸神祇は、「延喜式」神名帳に  
登載される「式内社」として格付けされ神祇体系が組織化され  
た。中央から地方津々浦々にいたるまで、古代より現代におよ  
ぶまで神道の拠点として「神社」が成立したのであった。仏教  
はまた国家宗教であった平城京の中央権力から離れ、平安の山  
岳仏教として思索と勤行に専念し宗教哲学を深めたのである。

一方では個人的民族的信仰に傾き、天台・真言の密教によつて、かえつて原始の呪術や祈禱が復活したかに見える現象を呈したといえる。

ところで、中央王朝朝廷の公家貴族は当代を代表する知識階といえようが、かれらの処世哲学あるいは生活信条とは如何なるものであつたろうか。おそらく前述のように、律令政治またその修正たる格式の諸規律を、有職故実の慣例として年中行事のまま勵行し、人事移動の「除目」に一喜一憂し、宮廷内に頻繁に開催される宗教・芸能の行事に和漢の才能を競い合い、天皇や摂関家を中心とする圍閣には過剰に反応した。むろん平穩にみえる世襲諸貴族の間にも隆替あり興亡あるは世の習いで、それらを正統な儒教思想や仏教理念で歴史的に認識しようとする態度は極めて稀であつた。かれらは自己の運命の良非や処世の巧拙に喜怒哀楽するにとどまり、それを解するに客観性のある道徳律を以てするに至らなかつた。ゆえに普遍的な人生哲学や倫理観を深めよるよりも、渡来の「陰陽五行説」に依存し、その日常的応用ともいえる「陰陽道」を愛用したのである。

「陰陽五行説」を宮廷中心の公私の人間關係に適用すれば、昇進の運、健康の良否、日常生活の吉凶など人間万事は、天地自然巡行に支配せられ、方位の空間や年月の時間さえも擬似科

学の數式のごとく一覽しうる。対人問題の不都合も、双方の責任すら相性の可否によつて解除される。人為の責任や道徳で組織された社会も、すべて天然の原理で運行すると考えるならば、個人の責めは免がれ、各自にとつてこれほどに気楽なことはない。しかし、人はそれぞれ意志があり自由があるので、目前の事物の推移を無為に傍観しえない。偶然に遭遇する事件が天の意志であつたとしても、それを受容するか退避するかは個人の意志である。そこで、貴族たちは「陰陽寮」の陰陽博士や巷間の有名な陰陽師たちに依頼して、良運に逢い、凶運から免れるために、天の意志を詳細に記した日毎の予定表「具注曆」を書いてもらうことになつた。人臣の最高位である摂政・太政大臣を極めた藤原道長さえ、日毎の日課を「具注曆」によつて定め、生活の一挙手一投足もそれによつて縛られるという、陰陽道時間表の僕しもとなつたのである。その道長が具注曆を遵守して生活した日録こそ、著名な国宝の「御堂関白記」なのであつた。

そもそも陰陽五行説の渡来記録は平城期をさかのぼる飛鳥朝にあつて、「書紀」推古十年の条（六〇二）の

冬十月、百濟の僧觀勒來る。仍りて曆本及び天文地理書、  
並た通甲方術の書を貢る。是の時、書生三四人を選びて、  
以て觀勒に学び習はしむ。陽胡史の祖・王陳（注）、曆法を習ひ、

大友村主・高聰、天文遁甲を学び、山背臣日立、方術を学ぶ。皆字びて以て業を成す。(下略)

と見える。天文・地理・曆本は現代も理解しうる用語であるが、「遁甲・方術」とは何か。遁甲は「後漢書」方術伝の注に「推六甲之陰・而隱遁也」とあり、占星術の一種ともいわれ、方術は考課令に「占候医卜」とみえる。「記紀」編纂の企画の詔を「記」序文に伝える天武天皇自身が、陰陽道に明らかったことは、「紀」に

生れまししより岐原なる姿あり。壮に及びて雄抜しく神武し。天文・遁中に能し。

とあるばかりでなく、「記」序文には即位の

清原大宮にして昇りて天位に即きたまふ。(中略)二氣の正しきに東じて、五行の序を齊へ、神理を設ねて以て俗を契め、英風を敷きて以て國を弘めたまふ。

とあって、「二氣」はむろん「陰陽の氣」であり、「五行」は「木火土金水」をさすから、陰陽五行の天文自然の理法によって統活の方針としたことを物語っている。

天武帝が陰陽道に堪能であったことは、知識のみならず実践の記録があつて、壬申の乱の最中に、

黒雲有り。広さ十余丈にして天に経れり。

の天象に対し「天皇異びたまふ」とし

則ち燭を挙げて親ち式を乗りて占へて曰く「天下兩つに分れる祥なり。然れども朕遂に天下を得むか」

の有名な記事があり、さらに四年正月五日に

庚戌に始めて占星台を興つ

とあつて、施政の上にも「天文曆数」策をすすめたことがわかる。以上のごとき奈良期以前の初期陰陽道の史料から考えると、大きく二つの領域に分けられると思う。それは「推古紀」の記載からして、「曆本及天文地理」といった自然科学的分野と、「遁甲・方術」とよばれる天人相関の運命論と応用技術的分野とである。後者には神祭・祈禱・吉凶・ト占などの儀礼が付加され発達してゆく。たとえば、「天文・遁中能」くした天武帝は、陰陽道の原理面と応用面の双方に長じたことを語り、「黒雲…十余丈にして天に経り」は天象観測の原理面を述べ、「燭を挙げて親ち式を乗りて占ひ」は応用技術の面を語っている。ただし、同じく六年六月野上行宮で、「雷電鳴り雨ふる」と甚し」のとき

天皇祈ひて曰く、「天地地祇朕を扶け給はば、雷雨息まむ」と。言訖りて即ち雷雨止みぬ。

は、外来宗教以前の農耕儀礼の「誓約」。呪術と考えられ、皇極

紀の祈雨呪儀とおなじく、固有原始いわば原神道の呪術かと思われる。しかも、平安王朝貴族に盛行したのは、前者の原理面よりも後者の応用技術面であり、後者には「易」や「讖緯の說」を加え、「道教」や「神仙道」さらに修験道や仏教の「密教」を交えて複雑をきわめる習俗を形成した。初期には王権や国家興亡に関わつた陰陽道も、平安宮廷貴族の間における「具注曆」には、冠婚葬祭をはじめ日常の茶飯事である外出・洗髮・剪爪の末節の吉凶にまで及んだのである。

### 安倍晴明と式神

平安王朝に随一の陰陽師として名を馳せ、摂関政治の最盛期に藤原道長らにもっとも信望あつく、廟堂において全幅の尊信をあつめていた人物、その名は安倍晴明という。朝野に陰陽道隆盛の時代、律令朝廷にも「陰陽寮」が設けられ上下の陰陽師がひしめく中に、なにゆえ晴明だけが傑出して著名となつたか。そもそも大陸渡来の陰陽五行説は、古代中国における天文曆数に運命論を混融させた「天人相関」論であり、国家・君主・人民個人などの命運を、天文・氣象・動物生態などの変化で解釈し予見しようとする擬似科学であつた。その天文や自然を観察

する博物学的思考は一見科学風ではあるが、人生の運命信仰と関連させるゆえに教理教条は複雑怪奇を極めることになる。

陰陽博士・天文博士を幹部とする陰陽寮は、近代に例えれば天文台や氣象庁に相当し、天象の変化を観測することによつて国家の命運や人事の変異を予測する「勘文」を上申した。天変地異による易世革命の予言や曆数における政変の予見などは、かの三善清行の「革命勘文」によつて「延喜」改元が行われたことが有名である。この天文運命学ともいふべき陰陽道は、国事の要諦にかかわるのみならず、官人貴族の個人的運勢をも支配したから、かれらは「方遣」「物のけ」「御霊」など日常生活規範として「陰陽道」に依存せざるを得なかつた。それが天文・陰陽師作製の「具注曆」として普及しはじめると、公家らは争つてそれを入手して実行しようとしながらも、しだいに繁煩で厳格な日程表に倦怠を覚えはじめた。そして、数多の陰陽師のなかでも、とくに奇瑞や功験をあらわし予言の確かな陰陽師に人氣が集中した。その第一人者が天文博士・安倍晴明であつたといえる。第六十五代花山天皇は安和元年十月に生れ二年八月に二才で春宮、十五才で元服、十七才で即位したが、寛和二年六月十九才を以て花山寺で出家入道、在位はわずか二年であつた。讓位の夜の姿は哀切であり、藤壺の妻戸から月を

眺めて夜明の街をさまよふ。「大鐘」によれば

さてみかどより東さまにゐて出しまいらせ給ふに、晴明が家の前を渡らせ給へば、(目明)みづからの声にて手をおびたしくはたくと打つなる。「帝降りさせ給ふと見ゆる天変ありつるが、すでに成りけりを見ゆるな。参りて奏せん。東に装束せよ。」といふ声を聞かせ給ひけむ。さりとて哀れに思し召しけんかし。

有名な花山天皇退位を予知した挿話である。卓抜な陰陽家・安倍晴明は、薄幸の花山帝の讓退位の宿命が、陰陽道の天変地異の観測から予知できたというのである。天文博士でもあった力量ともいえるが、功験伝説の多い晴明であっても、こと天皇の皇位繼承に関する挿話であるから、架空の創作とか過度の誇張は許されないであろう。さらに晴明に関する著名な靈能として、「式神」つまり小童型の神人を多く使役したことも、「大鏡」の同条にあつて、

「かつがつ式神一人、内裏入まいれ」と申しければ、目には見えぬものの、戸を押しあけ、(帝の)御後をや見参らせけん、「ただ今これより過ぎさせ在しますめり」と答へけるとや。

晴明の駆使した式神は、常人には「目には見えぬもの」らしい

が、験者の意のままに目耳となり手足となつて縦横に立ち働く。それは寛和より約三百年前の文武朝に天下を揺がせた修験道の祖・役行者が、大和山岳の鬼神を自由に使役した<sup>(6)</sup>ことと共通し、時代を風靡した大験者はかならず使役神をもつという系譜をついでいると考えられる。「式神」「しきじん・しきがみ」は「識神」「職神」とも書き、「倭訓栞」に「しきがみ・歌書に見ゆ、しきの神ともいふ。「新猿楽記」陰陽道の条に仕式神」と書けり。式伏といふ事もあり。実は人形の識神にて巫蠱の妖術なりといへり。「撰集抄」に物の識になんかかりと見え、「宇治拾遺」にしきにうてけると見え、古記に式に厭着<sup>(7)</sup>などいふも身代の人形より起るともいへり……」の説明は式神が陰陽道に固有の小鬼神のごとく考えられてきたが、平安期文献の「枕草子」「大鏡」「今昔物語」などに頻出し、夏越祓や大祓の「人形」から連想されたものとする、あるいは古代神道の禊祓呪術と関係が深いかもしれない。「記紀」のイザナギ神がミソギ儀礼の際にも、かれの身体装着物から種々なカミが生れ、水浴の折にも禍神や直日神などが生れ、それらのなかに「少童神」が存することを「紀」に記すのは、身体各部や細部の装身から生れるカミは「小童形」であることを意味するのではあるまいか。一方で、晴明が折紙で「鳥形」をつくり息を吹きかけると

白鳥と化して飛翔したことを、『古事談』<sup>(8)</sup>に「懐紙を取り出し鳥形を彫し、頰を唱へて投揚の処、白鷲となりて南を指して飛行し厭術者の住所をつきとめるのは、まさに晴明の使役する「式神」と同じである。平安朝に盛行した大祓・夏越祓などの「人形流し」の人形は、身体の撫物であるとともに、折紙の人形を仮の式神と見なし、魔除のため河海へ「投揚」するのである。心身の汚穢を附着して破棄するのではなく、「方相氏」の如く疫鬼を祓う呪力をもつ祓主の分身であり、式神の意味をもつ「小章神」が「人形」の本質と私は考える。

晴明の透察や予見が有名であるに並んで、かれの使う式神の評判も朝野に高かった。宮廷の内側から世相を酷評した清小納言も

しきの神もおのづからいとかしこし

と畏怖の心情を「枕草子」にしろした。『今昔物語』<sup>(9)</sup>巻十九に、「安倍晴明ト云フ陰陽師アリ、道ニ付きテ止ムゴトナカリケル」と全面的に晴明の存在を畏敬しており、巻十六「安倍晴明、隨<sup>(10)</sup>忠行<sup>(11)</sup>習<sup>(12)</sup>道語」に

此法師ノ共ナル二人ノ童ハ識神ニ仕テ来、若シ識神ナラバ  
忽チニ召シ隠セ」と心内ニ念ジ袖ノ内ニ二ノ手ヲ引入レ印  
ヲ結ビ……

と晴明の相手の僧も式神を使役した伝から、当時の式神呪術の流行を示しており、『宇治拾遺物語』<sup>(10)</sup>巻二に「少将なりける人の、しきの神にふせられる安倍晴明に加持せられ」たこと晴明はその式神を使って術を行なったと伝える。同書の晴明の条に家の中に人なき折は、この神を使ひけるにや、人もなきに<sup>(11)</sup>部<sup>(12)</sup>を明け下ろし門さしなどしけり。

と晴明邸の式神の不可思議を書きとどめる。『源平盛衰記』<sup>(11)</sup>巻十には、「職神」を仏神である十二神将に宛てる説があるが、私は前述のごとく役公の山岳鬼神の系譜を考えており、さらに後述の神祇の神使たる鳥獸を類推するので、神将説は採らない。

#### 陰陽師晴明と功験

安倍晴明(九二一—一〇〇五)は延喜二十一年ころ讃岐国国香之東郡井原に生れた。父は大膳大夫益材で天武朝功臣の子孫といわれるが、母は常人でなく異類の神狐であったという伝説<sup>(12)</sup>がつきまとうのは、いわゆる英雄異常出生譚であろう。かれが平安朝陰陽道の主役であったとともに、式神の使役でもつとも有名であるために、式神の原像は神使の鳥獸という私説から、稲荷の神使は命婦のキツネという信仰が平安期から存した

ことの連想とも考えられる。さらに、晴明の系譜について看過できないことは、かれの陰陽道の師が「賀茂氏」であることで、七世紀の大験者「役小角」もまた「賀茂」氏の出自ゆえに、晴明の験術も突然変異的に出たものでなく、原始の山岳靈験と道教・神仙道の系譜をつぐ上で、陰陽道天文道を加味したものと見えよう。「今昔物語」巻二十四に

幼時、賀茂忠行トヨユキ云陰陽師ニヒ隨、昼夜此道トヨユキ習ヒナラフ。

とある賀茂氏の始祖は「記紀」に著名な崇神朝の三輪山鎮祭の神主「オホタタネコ」と「記」は訳し、かれとまた三輪山神のオホモノヌシと巫姫との神婚による巫祝であった。晴明は天文の蘊奥をきわめ陰陽・曆算・推歩の諸道に明るく、「帝王編年記」卷十七には

安倍晴明是時人也、掌ツカサツ天文曆數事、昔者一家兼ツカサツ兩道、賀茂保憲トヨノリ以ツカサツ曆道トヨノリ傳ツカサツ其子光榮トヨノリ以ツカサツ天文道トヨノリ傳ツカサツ弟子晴明トヨノリ自ツカサツ此トヨノリ已ツカサツ後トヨノリ兩道相分

つまり晴明は賀茂忠行から「兩道相分」以前の陰陽道を習い、忠行の子保憲からは「天文道」を伝承されたことになるが、保憲の言に「この術全く邪道乱心を嫌ふ故に心中を正しくすべし」と戒められたと伝える。晴明の位官は従四位下・大膳大夫・天文博士・権少風・主計權助・左京權大夫・播磨守、殺倉

院別当等を歴任、寛弘二年八十五才で没した。

経歴のごとく中級官人でもあった晴明が、当代随一の陰陽・天文博士として朝野に令名を馳せた理由に、学識や技量が抜群であったことの他に、かれの人格が高僧や硯学のような遁世、脱俗的ではなく、すすんで平安京の都心に棲み（土御門の北、西洞院の東。また一条通川西入る。）、世情・人心に明るかった点を看過できない。宮廷貴族と市井民俗の交点において、その判断も妥当な平等を失わなかった。いわば、市井の聖トヨノリの智恵をもち占卜の（勘文）も適中確率が高かったのかもしれない。その意味において、先述の花山帝讓位の予知を市井で行なったことは、典型的な好例と思われる。超人的な天文・陰陽の才のみならず、かれの師である賀茂保憲の教の「心中を正しくすべし」の戒を守ったかれの言動には、ある倫理性が看取できる適例がある。「今昔物語」卷十九に、三井寺の智興トヨノリという僧が病重く弟子共が悲歎していたとき、晴明を呼んで泰山府君祭を行い病を治そうとした。重病のため身代りに僧一人出すことを求めたが誰も出ず、ついに身貧しき中年僧が名のり出て「都状」に名を記す。祭りを了ると師の病は軽減し、死を覚悟した弟子僧も結局助命されて、師弟は嬉し泣きしたという。このばあい晴明は陰陽師というより、呪医（巫医）の立場にあったわけだが、

それよりも全体に強い倫理性を有する説法であり、生命救済と師弟愛の物語に登場する晴明自身が、治癒の功績に先行して倫理性を有したことを語り伝えたのであろう。これまた保身と迷信の横溢した平安京に、市井の聖的存在とも見なしうる晴明の人物をうかがうに足る挿話と考えられる。

平安王朝における広義の宗教儀礼には、「延喜式」に規定され神祇官が執行する神祇祭儀のほかに、仏僧のたずさわる種々の会式があり、さらに陰陽師のとりしきる陰陽道祭があり、それらは一部混淆し習合するばあいもあつた。陰陽道祭には、「泰山府君祭・天曹地府祭・四角四境祭・本命祭・竈神祭・七瀬祭・巳日祓・阿臨祓」などあり、符呪・厭厭を行い、護符を下した。さきにも述べたように、天文遁甲のとくに応用技術の功験に超能力を示したという晴明は、一方では冷静な常識人で自然を透視していた。式神の使役で有名というのも、天人相聞説において自然と人間の間に鳥獣を介在させ、動物の超人的感性を利用したと私は考える。その根拠となる史伝は「古事談」第六にみえる藤原道長と晴明との逸話である。

入道殿(道長) 法成寺ヲ建立ノ夕メ日々御出仕有ル頃、白犬ヲ愛シテ飼ハシメ給ヒケリ。御堂ヘモ毎日御供云々ある日法成寺の寺門に入るとき、その犬が御前へ出て走り廻つ

て吠え、ついに直衣の襷たすきをくわえて引留めるので、何か故あるに違いないと、晴明朝臣を召し出す。晴明は沈思していたが、「君ヲ呪咀シ奉ラン者、厭術ヲ埋メテ御路ヲ超エ奉ラセムト構テ侍ルナリ」と具申する。さらに、晴明はつづけて

犬ハ本モト小ナルヨリ神通ノ物ナリ

と告げて、人間に数千倍する犬の超感覚を「神通」という形容で語る。ただちにその地面を掘らせると、土器二箇を打ち合せ黄色の紙捻かみで十文字に結んだ厭術の物が発見され、その呪咀の方式で厭術者を感じた晴明は

懐紙ヲ取出シ鳥形ニ彫シ、頌ヲ唱シ投擲スルニ、白鷺トナ

リテ南ニ指シテ飛行シ、この鳥ノ落留スル所が厭術者ノ住所：

の験により下役等が白鳥を追うと、六條坊門の川原院に棲む道摩法師のもとに落留した。道摩は召し取られ尋問されるか、結局罪科は課せず本國播磨へ追放した。これは厭魅の呪咀に対抗する除災の方術なのであろう。前述の通り、この道摩法師厭魅事件において、解決の総指揮は晴明が行なったものの、事件の端緒の証拠発見は道長愛育の「白犬」であり、犯人の捕縛は使役の「白鷺」であつて、晴明の駆使で名高い「式神」の原像は、手乗りの「鳥」とか飼ひ馴らした「犬」などの鳥獣という私説



を裏づけるのではないか。別稿<sup>(17)</sup>にも書いたように、天孫降臨の先遣神話に「姓名鳴女」という探偵鳥があるとか、「天鳥船神」は、後世の伝書鳩のような通信用訓練鳥を暗示し、「欽明紀」初頭の、秦大津父が山背国深草里で血闘していた「二の狼」対して、「汝は是れ貴き神にしてあらき行を染む」と言つて争いを分け、その因縁で「大蔵省」に抜擢されたのは、二狼を神格化したこと狼に化身した神性を見ぬく心眼を大津父が有したことによると考ふる。

そのほか「記紀」には鳥獸が天然と人間との介在として示視する神話が少なくない。出雲神話にはオホクニヌシと白ウサギ、神倭イハレヒコ（神武帝）を先導した八咫カラスや金色のトビ、「垂仁記」のホムチワケ王を発語させた「鶴」、「崇神紀」の倭トトヒモソ姫を神妻としたオホモノヌシの「小蛇」、「景行記」ヤマトタケル英雄譚の足柄坂の「白き鹿」や伊吹山の「白猪」などすこぶる多い。それらが後世の神祇祭祀においても、祭神の神使として定着し、稲荷神のキツネ、八幡神のハト、天神のウシ、三輪神のへび、熊野神のカラスなどとなり、祭神と混同されるほどに民間信仰化したのは、神話の再生産の信仰と私は考えたい。

晴明と鳥と式神との関係は「宇治拾遺」上の八に簡明に描

かれている。かれが宮中出仕の詰め所の「陣」に居たとき、気品あり風采もよい若い蔵人の少将が、車から下りて参内する途中、少将の頭上にカラスが飛んで糞をした。

晴明きと見て、（中略）「式にうてけるにか。この鳥は式神にこそありけれ」と思ふに、この少将の生くべき報やありけん。いとほしう晴明がおぼえて：

少将の許へ駆けより、今夜の命が危いと警告し一つ車で少将邸へ付き添い、身固めの法をさせ夜一夜加持祈禱する。明方ようやく他の陰陽師の調伏が判明し、その式神が白状するとともに調伏の陰陽師もみずからの式神の呪力で息が絶える。この伝承で重要な点が三つあげられる。第一点は先述の式神と使役鳥の関係が、明瞭に「この鳥は式神にこそありけれ」と晴明に認めさせていること。第二点は「式にうてける」「式をふせたり」「ふせける（陰陽師）」「式にうて、死に」「式ふせさせける（簀）」などの用語の多出である。従来<sup>(18)</sup>の解は「式にうて」は「式神に撃たれ」の略されたもの、「式をふせ」は（式神を使つて調伏する）の意とする。私は「式」をかならずしも式神の略を考えず、調伏や呪咀の儀式の「式」と考え、「式にうてける」は（調伏の式が適中し）と見、「式をふせたり」は（呪咀の式を隠し伏せている）と解しても意味が通ずると考ふる。

第三点は先にも述べたように、精明なる天文博士の人となりである。摂政道長らと懇意の精明は当代最高の政治家と肩を並べる階層に居たに拘らず、市井の庶民の声をきき、意外に寡欲で公正であったと私には思える。前記の「蔵人少将」は中堅官人であろうが、面識もなく何の門閥も因縁もない少将を、一夜まるであつた子が如く祈禱したという、名利を離れた精明の倫理性がしのばれる。

### おわりに

七世紀の初頭に伝来した陰陽五行説（曆本・天文地理書・道甲方術書）は、それ以前に伝来していた儒教・仏教・道教と習合して、陰陽道<sup>①</sup>を形成し、三百年後の平安時代にもっとも盛んとなり、その代表的陰陽師として阿倍晴明を生んだ。かれは天文博士の学識とともに天象の変化を観測して人間界の吉凶を予知する験者でもあつた。験者といへば三百年前の葛城山にすんだ「後行者」が想起される。かれが始祖と仰がれる「修験道」もまた陰陽道とおなじく内外宗教信仰との習合宗教といえるが、相違するところは前者が固有の山岳信仰を基盤とするに對し、後者は平安京という王都を中心とし、宮廷貴族と結びつ

き、初期武家・仏僧・都びともと関わっていたのである。「古今著聞集」に史伝があつて

御堂関白殿（道長）御物忌に、解脱寺僧正観修・陰陽師晴明・医師忠明・武士義家朝臣（時代的には頼光か）参籠して侍ける

ときに南都より早瓜が献上された。物忌中で不審に思い精明に占わしめると、瓜中に毒気あるを予見し、観修僧正が持すると瓜が動き出し、医師忠明が二郎に針をうち、と義家（頼光？）が腰刀で瓜をわると

中に小蛇わだかまりてあり。針は蛇の左右の眼に立ち…義家がなんとなく無雑作に瓜をわつたと思つたが、蛇の頭が切れていて

名をえたる人々の振舞かくのごとし

と『著聞集』の著者は讚仰している。平安京中にもっとも高名な陰陽師・高僧・名医・名門武将が、摂政道長の前でチームワークよろしく名技を發揮したという、やや出来すぎた史伝とも思われる。だが、この小事件の発端の御堂関白の危険を事前に予知したのは精明であり、宗教力・医学・武芸のいずれよりも陰陽道が先行し重視されたことを知るのである。

陰陽道の家は一子相伝のことが多く、精明の子、吉平もまた

秀れた陰陽師となり、父に勝るとも劣らぬ験術の名を成した。

『古今著聞集』術道第九<sup>(20)</sup>に、

陰陽師吉平、醫師雅忠と酒をのみけるに、雅忠盃をとりて、  
うけてしばし持ちたりける

を吉平が見て「御酒<sup>みま</sup>迅く参り給へ。只今地震<sup>ちゑい</sup>の振り候はんずるぞ」と注意した。その言葉の通り、とたんに地震がゆれたので、酒がぶつとこぼれてしまった。丹波雅忠は典薬頭、丹波守・侍従となり二位に昇った要臣であり、吉平もまた主計頭・陰陽博士・従四位上をつとめた中堅官人であるから、この逸話も全くの架空と考えられず、何かの根拠があつて伝承化したのであるう。

平安王朝は神仏習合を軸として、とくに台密や東密の加持祈禱、修驗道山伏の行法、道教神仙術と浄土思想といった諸宗教の混淆の時代であつた。それらの隆盛はいずれも宗教の本山である神社、仏閣等を有して宗教者が活動し、信者が集合したのに対して、陰陽道は以上の如き宗教本山を有せず、しかも、朝野に幅広い盛行を見せ陰陽師がある特殊な権威を有していた理由は何だろうか。第一には先述のごとく律令朝廷に「陰陽寮」が設けられ、官撰の陰陽博士・曆博士・天文博士・漏刻博士といった権威を揃えているから、いわば古代の科学技術的存在

を有したこと。第二には天人相関思想から、天象の変化や暦日の巡環が天下国家の命運と相関し、氏や人の運勢をも支配すると考えられた。それが次第にエスカレートして個人の行住坐臥、挙措進退にまで及び、生活全般の規範を陰陽道が左右すると信じられたことである。

したがつて高次の既成宗教が、人間の過去・現代・未来について宏大な教理を説き、宗教体系をもつて整然たる教示を展開するときにも、常人には抽象的な理想論として映ずるばかりが多い。平安京の知識層である宮廷公家においてすら、目前の歴史的事件や日常の禍福の現象の説明に手的取り早い陰陽道を、平常の指針とし、具注曆を日課の「手引書」として選んだのであつた。陰陽道思想が宮廷の年間行事や神社の宗教儀礼、都鄙の四季民俗まで及んだのは、そのためと思われる。安倍晴明を象徴とする陰陽道が、平安期を最盛期とするのみならず、中世武家社会においてもなお深く信憑せられ、近世には安倍氏の子孫「土御門家」<sup>(21)</sup>が全国陰陽師を支配し、現今まで迷信を含みつつ生活史の底辺に瀰漫している現状を、無視することはできないと私は考える。

注

- (1) 『日本書紀』卷二十二・推古十年の条
- (2) 同書・卷二十八・天武上・即位前記
- (3) 同書・同卷・天武元年六月の条
- (4) 『三善清行』革命勘文、昌泰四年三月二十二日に出され、七月十五日に「延喜」と改元された。
- (5) 『大鏡』第一卷・六十五代花山院の条
- (6) 『統日本紀』文武三年五月の条
- (7) 谷川士清『倭訓栞』(明治三十一年十月・成美堂蔵版)
- (8) 『古事談』第六「入道殿建<sub>ニ</sub>立法成寺<sub>一</sub>」
- (9) 『今昔物語』卷十九第廿四「代<sub>レ</sub>師入<sub>ニ</sub>泰山府君祭<sub>一</sub>都状<sub>レ</sub>僧語<sub>一</sub>」
- (10) 『宇治拾遺物語』卷二八「晴明・藏人少将を封ずる事」
- (11) 『源平盛衰記』卷十に「一條戻橋と言ふは、昔安部晴明が天文の渊源を極めて十二神将をつかひけり。その妻職神の顔に畏ぢければ、かの十二神を橋の下に呪しをきて、用事の時に召しつかひけり。…されば十二人の童子とは十二神将の示現なるべし。
- (12) 『臥室目件録』には晴明の母を化生のものとする伝があり、神狐伝説は信田の森の「葛の葉狐」を晴明の母とする巷説から、五説経の一の「信太妻」が作られ「阿倍童子」「狐女房」などの説話となり、晴明を祖とする陰陽師集団が広めたともみられ

る。

- (13) 『今昔物語』卷二十四第十六「安倍晴明隨<sub>ニ</sub>忠行<sub>一</sub>習<sub>レ</sub>道語<sub>一</sub>」
- (14) 『帝王編年記』卷十七・一条院(國史大系第十二)
- (15) 注(7)書に同じ。
- (16) 注(8)書に同じ。
- (17) 拙著「古代神道の本質」「天馳使と海人馳使」(平成元年十二月・法制大学出版局)
- (18) 注(10)書に同じ。
- (19) 『古今著聞集』卷七術道第九「陰陽師晴明早瓜に毒気あるを占ふ事」
- (20) 同書同卷「陰陽師吉平地震を予知する事」
- (21) 拙著「古代祭祀伝承の研究」「陰陽道の伝流―土御門陰陽家をめぐって」(昭和四八年一月・雄山閣)